

研究ノート

家族システムに関する一つの考察Ⅳ

杉本大輔

要約

本稿では、筆者が毎年執筆している研究ノート「家族システムに関する一つの考察」の前稿「家族システムに関する一つの考察Ⅲ」（星槎道都大学研究紀要第6号 2025年3月発行）の内容に若干の修正を加えたうえで、家族システムのクロノ的展開における家族システム構築の課題について考察していきたい。

キーワード：家族システム，構造・機能分析，クロノシステム

1, 小室直樹の構造・機能分析による家族システムの再考

考察に先立ち、筆者が、この論稿の分析ツールとして用いている小室直樹の構造・機能分析理論を今一度紹介したい。①社会を変数の束であると考え。そこには、いろいろな変数が見出される。これは社会をシステムとして捉えている故である。②その変数は、お互いにバラバラに動くのではなく、様々な制約条件のもとに、動いていると考える。この制約は関数関係なのだが、この関数は何本もある。変数が n 個あれば、関数も n 本あると考えなければならない。それで連立方程式が解けて、それぞれ変数が特定の値をとるようになっていく。③この関数関係を構造と考える。変数と変数を結び付ける制約をすべて構造と呼ぶ。この構造を所与とした場合に、変数の値が決まることを均衡と呼ぶ。④この構造は、さしあたり安定だと考えられるが、これは永遠不変のものではなく、一定の条件下で変動していく。構造が変動するかしないかを定める条件が機能である。構造の下で変数の値が決まると、その機能が十分に達成されていない場合に、構造が変動する。この小

室の分析を受け、筆者は家族成員間の結びつきを家族構造とし、それを中心とした家族外との関係性を含めたものを家族システムと定義した。ここで、上記の小室の構造・機能分析に則って、家族構造を再構築して、いきたい。①“家族は一人以上の成員で成り立っている。各々の成員は、父、母、兄、妹など、家族内の地位を付与される。この地位は生得的な地位であり、定数であるが、その役割は必ずしも一定ではなく、変数である。②”家族成員はお互いにバラバラに動くのではなく、様々な制約条件のもとに動いており、それぞれの役割（変数）が特定の値をとるようになっていく。③“家族成員が一定の役割を果たし、それを成員各々が納得、同意していることを構造と呼ぶ。これを所与としたとき、役割の内容が決まることを均衡とする。④”この家族構造は、永遠不変のものではなく、一定の条件下で変化していくと考え、家族構造が変動するかしないかを定める条件が機能である。⑤“その機能が十分に達成されていない場合に、構造は変動する。

2, 家族機能の再考

ここで、前稿に引き続き、家族機能について考えていきたい。家族における変数を、成員それぞれの役割と筆者は定義した。成員が各々の役割について、納得・同意し、それを遂行しているとき、均衡は保たれ、構造が変動することはない。しかし、突発的なインシデントにより、成員各々の役割が増減し、あるいは役割の変更交代が起こり、それを成員が納得・同意しなかった、あるいはできなかった場合、均衡が崩れ、家族変動が起こる。では、変動に至るプロセスを回避するための家族機能を考察するとき、筆者は、家族内成員における相互作用、家族外システムへのアクセスの可否に求める。前者の家族内成員間の相互作用は、普段に日常生活におけるコミュニケーションを基盤として、各々が持つ役割を相互に認識し、それによって他の成員の役割を各々が担えるか、あるいは、どこまで担えるか、を認識することである。いうなれば、成員相互間における役割の代替機能である。後者は前述した家族システムに関連して、家族外の人間に役割の代替あるいは補助を求めることにより遂行される。これを機能とするためには、その基礎機能として、家族外関係を普段から構築しておくことが求められる。これを家族の機能とするか、成員各々の役割とするかについては、さらなる考察が必要である。また、家族外の関係性に関しては、成員各々の人間関係だけでなく、家族の居住する自治体に、家族がひんしている危機に対応できる地域資源を把握しておくことも求められる。これも家族の機能とするか、成員各々の役割とするかは考察する必要がある。特に、この場合、家族の居住する自治体の持つ福祉機能ともかかわってくるので、慎重な考察を要する¹⁾。

3, 家族システムにおけるクロノシステムに関する考察（家族システム最単純モデル構築のための序章として）

筆者は前項で、家族システムのクロノ的機能として「現代社会に適した関係性の構築、あるいは時代時代に合った関係性を把握する機能、仮に関係性は正機能とする。これは、過去において是とされた関係性が必ずしも現代においては通用しない、ということ認識する必要性が生じることにより、家族機能としての必要性があると考え²⁾と記した。これは時間の推移とともに家族形態は変化し、同時に家族外の間人間関係も、その形態及び関係性が変化することからくる家族関係のアップデートの必要性を考慮した者であり、これ自体は必要な機能の一つである、と考えている。しかしながら、クロノという時間軸の推移を前提とした要因を考えたとき、そこには、一つの家族の発生から消滅までを前提とした家族形態と家族役割の変化の考察の必要性が生じる。これは、これまでの家族社会学において、ファミリーライフサイクル、ファミリーライフコース、ファミリーライフステージ、定型家族、派生家族、聖職家族といった、各々の研究テーマの下で考察されてきたものであるが、本稿においては、それらを前述の家族システム論上で一つにして考察したいと思う。なお、ここで考察の対象として例示するのは、一組の夫婦と、その子どもからなる家族形態であり、単身家族世帯やシングル家族世帯は含まないものとする。無論、それらの家族形態における分析も必要であるが、本稿ではオーソドックスの家族形態を考察の対象とし、家族システム生成の過程の最単純モデル構築のための足掛かりとした。また、本稿では、やはりオーソドックスに起こると考えられるファミリーライフステージを家族に起こる普遍的インシデントとして採用しており、突発的なインシデントは考慮していない。これもまた、考察する必要性は感じているが、今回は最単純モデル構築のための試論として考察すること、また、普遍的なファミリーライフステージ

における対処能力を有するからこそ、突発的なインシデントに対応する機能を有する家族システムの構築が可能であると考えられる湯である。

(1) 家族形成期

一組の男女が結婚し、家族を形成する。この時、夫婦間で夫、妻としての地位と、その役割の同意がなされる。これにより、家族形成初期における家族内役割関係が成立する。また、夫婦それぞれの親族等のインフォーマル関係、つまりは家族形成初期における家族システムの初期構築がなされる。無論これは親族に限らず、友人知人関係なども含まれるが、これにより、一つの家族構造と家族システムが誕生する。

(2) 子育て初期

この夫婦に第一子が誕生する。これにより、家族は最初の形態の変化、つまりは家族構造の変化を余儀なくされるが、ここで「育児」という事象により、夫婦間の役割に若干の、あるいは大きな変化が訪れる。この時、役割変更に対して夫婦間における相互作用と家族システムへのアクセスの成否が、この後の家族構造に影響を与える。いわば、家族システムが有機的に機能するかの最初のハードルであるが、メゾ的なヒューマンネットワークの有機機能、及びエクソ的な地域資源へのアクセス、そして家族構造内の相互作用が有機的に連携し、機能するかが問われる。

(3) 子育て中期

子どもの就学により、夫婦間の役割にさらなる変更が起こる。同時に、子どもの成長に伴い、子どもを介してのインフォーマルな関係及びフォーマル機関との関係が活性化する。また、夫婦各々のインフォーマルな関係も変化することにより、夫、妻、子どもインフォーマル関係の関連を考慮した新たな家族システムの構築が求められる。家族システムの再構築については、新たなヒューマンネットワークを取り入れるだけでなく、過去のヒューマンネットワークとの継続的つながりも考

慮されるが、これは、家族構造の維持のために「何が必要か」を静観の相互高2によって検討され、その結果によって構築が決定される。

(4) 子育て後期

子どもの就学期の終盤であり、その後のこどもの進路に関しての決定がなされる。この時期の課題は、子どもとの同居の維持か別居しての独立か、であり、同居した場合、子どもの進路にもよるが、新たな役割変更が起こる。それに関しての家族内の相互作用により、役割変更を家族成員が納得できるか否かにより、家族構造の変動の可能性が変化する。別居の場合、子どもは新たな世帯を構成するのであるから、子ども自身に独立した役割が付与される。このとき、子どもが自身に付与された独立した役割を受け入れるか、あるいは親と同居していたころの役割を引きずるか、あるいは、双方による役割葛藤に苦しむかによって、家族構造の変動の危険性が表面化する。同時に、別居時のこどもの新たなヒューマンネットワークの構築、言い換えれば、単身世帯の家族システムの構築が課題となる。この時に、子どもが新たな独立した役割を受け入れ、親世帯をも自身の家族システムに組み込むか、あるいは、上記の役割葛藤を引きずったままシステムを構築するかによって、親世帯、子ども世帯双方の家族システムの変動の可能性が表面化する。

(5) 子ども結婚期

子どもが結婚することにより新たな家族構造、家族システムが構築される。この後の課題は(1)～(4)までと同様であるが、この時に、親家族が持つ家族システム、ヒューマンネットワークをどこまで継承できるか、という課題が発生する。これは親家族が、その親世代から継承してきたものと同様に、子ども家族のシステム構築に関して重要な要因となる³。

以上、クロノシステムの分析においては、各ファミリーライフステージにおける家族構造内の役割

変更時における成員間の納得と同意, そしてメゾ・エクソレベルにおける家族システムのアップデートの可否が課題となる。それは「家族の自己組織性」ともいえるシステム再構築の課題である。これについては, システム論における自己組織性, オート・ポイエーシス論の視点のもとに, さらなる分析を必要とするが, 一つの仮説として, 家族の自己組織性, つまりは, 家族自身が外部に何らかの要因を発信し, 自身の力で家族そのものをアップデートしていくためには, 家族構造の「堅固性」ともいうべき変動の可能性が極めて少ない家族構造の構築が不可欠である, と考える。堅固性とは, 家族成員間の家族機能, つまりは, 成員間の相互作用が活発に行われ, 家族内役割が柔軟に変更されていく状態と定義する。無論, 役割が固定することで, 家族構造の変動の可能性が極めて少ないのであるならば, 変更の必要はないが, それを納得・同意するのは家族成員であるのだから, やはり, 家族成員間の相互作用が有機的に機能している状態であると言える。生得的な地位に固執し, かたくなに役割の変更を拒む状態を「凝固性」と定義する。どのような家族にも到来するファミリーライフステージにおいて, 役割の変更がなされなければ, 家族構造そのものが変動するかもしれない状態で, 生得的な地位と役割に固執するならば, 突発的なインシデントに対応する家族内ストレスは極めて弱くなると考える。

4, 今後の課題

本稿では一つの家族の発生から起こるファミリーライフステージを追い, 各ライフステージにおける家族構造と家族システムにおける課題と, その克服過程を提示することにより, 家族システムのクロノシステムにおける機能, その, 各ライフステージにおける家族システムの最単純モデル構築を試みたが, その過程において, 「家族の自己組織性」という新たな視点にたどり着いたが, システム論における自己組織性とオート・ポイエーシス論の考察を重ね, 新たな発見につなげていき

たい。また, 本稿では家族役割の具体的内容は明示しておらず, いささか捨象気味に考察を続けてきたが, これも, 過去の研究成果を考察し, 明確な形にしていきたい。同様に, 家族機能についても「家族成員間の相互作用」という, これも捨象気味の表現を用いたが, 先行研究における「家族内コミュニケーション」などを詳察し, 具体的な概念に昇華していきたい。

注記)

- 1, 野々山久は「家族福祉は地域福祉を前提とする」と定義し, 地域社会における福祉資源の機能性が, 家族福祉の成否を左右するとした。筆者の家族システム論におけるエクソシステムにおいても, 地域資源の把握が家族構造の機能と定義したが, 家族の居住する自治体における福祉資源の多少は, 家族システム及び家族構造の変動に, 大きくかわると考える。
- 2, 杉本「家族システムに関する一つの考察Ⅲ」星槎道都大学研究紀要第6号 p147
- 3, この親世代からのヒューマンネットワークの継承の多寡によって, 子ども世帯の家族システムの構築に格差が発生する要因を筆者はかつて戦後からのディケードごとに考察したが(杉本「家族システムに関する一つの考察Ⅱ」星槎道都大学研究紀要第5号), ヒューマンネットワークの世代間継承が子ども世帯の家族システム構築だけではなく, 家族構造の変動の可能性を大きくすることも推察される。

引用・参考文献)

- ・森岡清美 監修 石原邦雄 佐竹洋人 堤マサエ 望月 嵩 共編「家族社会学の展開」培風館 1993年
- ・小室直樹「日本いまだ近代国家にあらず」ビジネス社 2010年
- ・橋爪大三郎 副島隆彦「小室直樹の学問と思想」ビジネス社 2022年
- ・小室直樹「危機の構造 日本社会崩壊のモデル」ダイヤモンド社 1982年
- ・木戸功「概念としての家族 家族社会学のニッチと構造主義」新泉社 2010年

- ・小室直樹「論理の方法 社会科学のためのモデル」東洋経済新報社 2003 年
- ・清水新二編「家族問題—危機と存続—」ミネルヴァ書房 2000 年
- ・野々山久也 袖井孝子 篠崎正美編「いま家族に何が起きているのか—家族社会学のパラダイム転換をめぐる—」ミネルヴァ書房 1996 年
- ・落合恵美子「21 世紀家族へ」有斐閣 2007 年
- ・目黒依子「個人化する家族」勁草書房 1987 年
- ・森岡清美「家族周期論」培風館 1973 年
- ・野々山久也 清水浩明編「家族社会学の分析視角」ミネルヴァ書房 2001 年
- ・牟田和恵「戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性—」新曜社 1996 年
- ・落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川書店 2000 年
- ・山田昌弘「近代家族の行方」新曜社 1994 年
- ・上野千鶴子「近代家族の成立と終焉」岩波書店 1994 年
- ・岡村重夫 黒川昭登「家族福祉論」ミネルヴァ書房 1971 年
- ・野々山久也編「家族福祉の視点—多様化するライフスタイルを生きる—」ミネルヴァ書房 1992 年
- ・森岡清美「家族変動論」ミネルヴァ書房 1993 年
- ・山田昌弘「迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体」有斐閣 2005 年
- ・山田昌弘「少子化社会日本 もう一つの格差の行方」岩波書店 2007 年
- ・山野則子「子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク グラウンテッド・セオリー・アプローチによるマネジメント実践理論の構築」明石書房 2009 年
- ・松田茂樹「何が育児を支えるのか—中庸なネットワークの強さ—」勁草書房 2008 年
- ・大谷信介「現代都市住民のパーソナルネットワーク—北米都市理論の日本的解説—」ミネルヴァ書房 1995 年
- ・前田正子「子育てしやすい社会—保育・家庭・職場をめぐる育児支援」ミネルヴァ書房 2000 年
- ・宮台真司 熊坂賢次 公文俊平 井庭崇「社会システム論 不透明な社会を捉える知の技法」慶應義塾大学出版会 2011 年
- ・T・パーソンズ「社会的行為の概念」全 5 巻 野上毅 厚東洋輔ほか編 木鐸社 1971-89 年
- ・T・パーソンズ「社会体系論」佐藤勉訳 青木書店 1974 年
- ・T・パーソンズ R・ベールズ「核家族と子どもの社会化」橋爪貞雄ほか訳 黎明書房 1981 年
- ・N・ルーマン「社会システム論」上下 佐藤勉監訳 恒星社厚生閣 1992-95 年
- ・N・ルーマン「目的概念とシステム合理性」馬場靖雄 上村隆弘訳 勁草書房 1990 年
- ・N・ルーマン「法と社会システム」土方昭監訳 新泉社 1983 年
- ・N・ルーマン「社会システムのメタ理論」土方昭監訳 新泉社 1984 年
- ・N・ルーマン「社会システムと時間軸」土方昭監訳 新泉社 1985 年
- ・上野千鶴子「おひとりさまの老後」法研 2007 年
- ・上野千鶴子「男おひとりさま道」法研 2009 年
- ・マーサ・A・ファインマン「家族、積みすぎた方舟 ポスト平等主義のフェミニズム法理論」上野千鶴子監訳・解説 速水葉子・穂田信子訳 学陽書房 2003 年
- ・柴野昌山編「しつけの社会学 社会化と社会統制」世界思想社 1989 年
- ・上野佳代子「児童虐待の社会学」世界思想社 1989 年
- ・小室直樹「社会動学の一般理論構築の試み」（『思想』）岩波書店 1966 年
- ・小室直樹「構造機能分析と均衡分析」（『社会学評論』）1966 年
- ・小室直樹「構造機能分析の原理」（『社会学評論』）1967 年
- ・小室直樹「構造機能分析の理論と方法」（『社会学評論』）1969 年
- ・小室直樹「ソビエト帝国の崩壊 瀕死のクマが世界であがく」光文社 1980 年

One Argument Considered with Family System Theory for Social Work IV

SUGIMOTO Daisuke

Abstract

In this article, I make some minor revisions to my previous research note, “A Consideration on Family Systems III,” which I submit annually, and use Naoki Komuro’s structural and functional analysis to redefine the family system, while also redefining the functions of the family system within the chronosystem.